

江口渙自選作品集

第

江口渙自選作品集



江口渙自選作品集 第一卷

定価 一六〇〇円

一九七二年八月十日 初版

著 者 江 口 渙

発行者 松 宮 龍 起

発行所 株式会社新日本出版社

郵便番号一〇二一

東京都千代田区富士見二の一三の一四

電話東京(二六二)四七三三(営業)

(二六五)二〇七五(編集)

振替番号 東京 一三六八一

印刷 享有堂印刷株式会社
製本 古賀製本株式会社

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします

わたしの自選作品集の発刊にあたって

こんど新日本出版社から、わたしの自選作品集が全部で三巻出版される。

わたしの文学生活はじつに長い。今からふりかえって、ちょうど満六〇年になる。大正元（一九一二）年の十二月号の「スバル」に短編小説「かかり船」を書いたのが、わたしの文学的出発の第一歩であった。その後の長い年月のあいだに、わたしは断続的ではあるが数々の小説も書き、童話も書き、文芸評論も書き、社会評論も書いた。また、戦後になつてからも、全部で四巻の回想記を書き、ほかに一卷の歌集さえも出している。その上、いまなお「少年時代」という回想記を二年半にわたる続き物として「民主文学」に書き続けている。

わたしはこの七月二十日で満八十五歳になる。そしてこんどはじめて自選作品集が出版される。だから、生誕八十五年の、そして文学生活六〇年のわたしにとって、この三巻の自選作品集はまさに絶好の記念碑である。

わたしはこれから先もまだまだ書き続けるであらう。わたしの頭がいまのようにはつきりしている限り、また、わたしの健康がつづく限り、書き続ける。それこそがわたしの生涯の最後の生き甲斐といるものである。

長い長い人生の旅路のなかで、人間の生活と世界観とはしばしば変転する。人によっては生活が変転するに従って世界観が変転する場合と、世界観の変転にみちびかれて生活が変転する場合と、おおかたにいつて二つある。ここでの生活という言葉の中には「生活環境」という意味をもふくませてあることは、もちろんである。

わたしは大阪偕行社小学校という陸軍将校の子弟を教育する学校の高等二年のとき「少年世界」に連載されたストー夫人の「アンクル・トムの小屋」の抄訳を読んでアメリカの黒人奴隷の生活の悲惨さを知りひどく子供心を痛めつけられた。また、東京府立一中の一年生のとき、石橋思案が訳した「十五少年漂流記」を読んで、南太平洋の離島に漂着した十五人の濠洲少年がつくり上げた生活共同体のたのしさや安らかさに、強いあこがれを持った。この二つの物語がわたしの子供心におぼろげながら一つの世界観を持たせたようだ。

さらに熊本第五高等学校の文科二年のとき、無政府主義者幸徳秋水らの「大逆事件」が起こって、いわゆる「逆徒」十二名がただの一審で死刑にされた。あの事件はわたしに日本の天皇政治、いまだという天皇制に深い疑いをもたせ、同時にはげしい怒りを感じさせた。

だが、心の底には五高時代に強い影響をうけたベルグソンのフランス・ロマンティズム哲学が大きく根を張っていた。だからこそ、わたしが東大文科に入学後間もなく書いた「かかり船」という短編があんなにもロマンティックな物となった。

やがて青春期のロマンティズムがうすれてリアリズムに変わったとき、一九一七年にはロシアに二度の社会革命が起こった。とくにレーニンに指導されたボルシェビキ革命が勝利し、世界史上はじめての労働者国家ソ連邦ができた。この革命はわたしの世界観を大きく変えた。そしてわたしの文学

は批判的リアリズムに発展した。その時期の代表作が「労働者誘拐」である。

一九二〇年に日本社会主義同盟という社会主義運動の統一戦線が結成された。その中へ進んで入っていったわたしは、ベルグソン哲学の影響から大杉栄のアナルコ・サンディカリズムに共鳴した。さらにそれを乗り越えてテロリズムの道へと突き進んだ。そして古田大次郎や中浜鉄の組織したテロリスト集団の支援に力をつくした。そのあいだ全く文学を捨てた一時期がある。だが、彼らがあいついで死刑になったとき、わたしは革命運動におけるテロリズムの空しさを身をもって知った。そしてわたしはきびしい挫折感に襲われて数年のあいだ苦しみぬいた。

その挫折感と苦悩からわたしを救い出してくれたのが、マルクス主義の科学的社会主義であり、弁証法的唯物論と史的唯物論である。そしてわたしの文学的志向は批判的リアリズムからプロレタリア・リアリズムへと大きく発展した。その結果、一九二九年二月に日本プロレタリア作家同盟が結成されると、わたしも進んでその戦列に加わることになった。そして、その後は世界観の上ではマルクス・レーニン主義の道を、ただ、一すじに進んで来て、今日にいたっている。

およそ文学作品というものは、題材とその題材に対する作家の態度と、それらのものへの正しい文学的表現との三つから成立する。題材は作家の直接的な体験から生まれる場合もあり、また、間接的な体験から選出される場合もある。だが、題材に対する作家の態度は、そのときどきの作家の世界観が決定する。

だから作家の世界観が変化し進化すれば、題材に対する作家の態度も、変化し進化する。わたしの六〇年にわたる文学生活の中で、わたしの世界観はしばしば変わった。そして最後には現在のわたしが持っている世界観、すなわちマルクス・レーニン主義の世界観に到達したのである。この三巻の中

に収められた文学作品が、わたしの六〇年もの文学生活のあいだに、世界観がどのように変化し進化したかを、読者のみなさんの前に、必ず正直に告げるであろうことを、わたしは深く信じている。

一九七二年六月三十日

栃木県烏山町中央一ノ十五ノ五の自宅で

江口 渙

第一卷
目次

わたしの自選作品集の発刊にあたって

小 刑 吏 1

蝦 蟄 24

馬車屋と軍人 32

二種の微笑 49

児を殺す話 66

祖先崇拜 116

労働者誘拐 136

顔 174

蛇 と 雉 191

中尉と廃兵 199

遼河の夜	231
赤い矢帆	253
水田良吉	270
巴西侯	300
馬丁	318
性格破産者	341
父	464
解題	473

装丁 まつやま ふみお
 題字 著者
 写真撮影 田村 茂

小 刑 吏

恭二は今日も門口から、犬の名を呼びながら入って来た。

いつも門口に恭二の帰りを待ち受けては飛びつくはずの犬が見えない。薄暗い中へ薪や櫓を堆高く積んだ土間をぬけて、台所口から中庭へ出た。幾つかの土蔵に囲まれた中庭には蓆が幾枚も乾してあった。大株な蘇鉄の下では、いつものように鶏が四、五羽、砂を浴びている。しかし犬は見えない。恭二はさらに、土蔵と土蔵との間をぬけて、重い木戸を開けて、裏の畑へ出た。こんどは出来るだけ大きな声をして、ヒロ！ ヒロ！ と繰り返して叫んだ。やっぱり犬はいない。

何だか受くべきものを受け得なかったような気がして、傷つき易い少年の心は今日もまた暗い失望に打たれた。

畝には人蔘が小刻みな葉を、暗い光に伸ばしている。菰豆はいつの間にか大きな莢になった。どこかで微かに蛇の音がする。恭二は気が抜けたように書物の包みを投げ出して、地面へ尻を落とした。

「ヒロが見えない。今日もまた一人ぼっちだ、一人ぼっちならいっそ日が落ちるまでこうしていたい。どうせ自分は『家』というものに捨てられたような子供である。あの薄暗いトゲトゲした『家』の中には、なるべくいたくない。そして夕方ヒロが自分を探して慕い寄るのを懐かしく眺めるまで、一人でこうして坐っているんだ」恭二はこんな事を考えながら、畝に燃える陽炎の糸を、心寂しく眺めた。

恭二はこの四月に町の中学へ入った。学校までは小一里ある。畑や、田圃や、雑木林の丘を縫って走る村道を通っては、毎日一人学校へ行った。近所から同じ中学へ通う生徒は大人いるが、恭二はものを言わない。道連れになろうともしない。ただ毎朝必ず犬が、村境の橋まで送って来る。そこで犬を追い帰して、雑木林の坂を振り返り上って行く。そして小倉服をきた恭二の姿が、丘の上に消えて行くまで、犬は必ず橋の袂に坐っていた。恭二が蒸すような野の光に顔をほてらせながら、帰って来る頃には犬は必ず門口に待っていた。畑越しに小さい恭二の姿が見えると、犬は嬉しそうに走り寄って、腰へ飛びついたり、背中を地に摺らせて、小さい靴にまといつく。どうかすると、橋の袂まで、迎いに来ている事がある。二人の仲はかくまでに親しかった。

今日も恭二は学校で、数学の教師にさんざんいじめられた。学校を出た時には、どこか開放されたような自由な心になりながら、夏に近い田舎道を、俯きがちに歩いて来た。重箱に髻をうえたような、数学の教師の顔が、底気味悪く笑いながら後からついて来るような気がした。今日に限って、いつもよりもお早くヒロに逢いたい。久しく洗ってやらなかった。久し振りで川へ入れて、綺麗に洗ってやりたい。そして犬が濡れた毛並を振わせながら、威勢よく野や丘を躍り廻る姿が見たい。

銀の糸よりも繊細い少年の心は、こうした慰藉のおぎないを求めながら帰って来た。それなのにヒ

口は見えない。恭二の失望は一通りではなかった。これほど楽しんで帰って来たのを、犬は汲んでもくれず、今日もまたどこかへ遊びに行ったのかと思うと、何となく裏切られたような気がして、それが恨めしくもあった。

その後こうした日がしばらく続いた。ヒロがこの頃はなぜこんなに家をあけるのか、恭二にはそれが解らなかった。犬小屋の前のお碗には、二、三日前にやった御飯が、黴^{かび}に薄汚なく腐っていた。どこで何を食べているのかしら。もしかすると、誰かに盗まれたのではないかしら、と考えて、裏の畑から近所の垣を覗いて歩いた。

時どき村端れや、寺の墓場でヒロの影を見た。それは一匹の牝犬を、大勢の犬が物狂おしく追わえている、その中に自分のヒロも一緒に狂い廻っていた。いくら呼んでも帰って来ない。悪くすると振り向きもしない事もある。自分の心を汲んでくれず狂い廻る犬の心が、口惜しくもあり、腹立たしくもあった。

こんな時には、恭二は、捨てられたような薄寒い心を抱きながら、力なく家へ帰って来る。その訴えるようにもの寂しい少年の姿を見て、下男の甚吉はこんな事を教えた。

「坊ちゃん、ヒロのお碗の上へ物差しを置いて待ってて御覧なさい。きっと帰って来ますよ……お碗は汚れたまんまでなけりゃいけませんよ」

これを聞いた時の恭二は、しみじみと嬉しかった。お碗に置いた物差しの力が、自分の心に増して犬を引き付けてくれるのかと思うと、世の中にある禁呪^{まじない}「まじない」というものの魔力をいまさら強く感ぜざるを得なかった。

恭二はさっそくそれを試みた。しかし犬は依然として帰って来ない。お碗の上の物差しに黄昏^{たそがれ}の光

が流れて、犬小屋の中の古藁ふるわらは、棲すみ捨てられた寂しい色を、晩春の風に動かしている。しかしヒロは帰って来ない。

恭二は、夜の更よけるまで、犬小屋の側で立ち尽くした。涙に濡れたような雲が、重く夜半の空を閉ざして来た。生ぬるい風が薄気味悪く頬を吹くたびに、梅の若葉がざわざわと、蒸されるような声で、苦しく囁き交わした。「ああ、ヒロはどうしても、帰って来ないのか。なぜ帰って来ないのかしら」と思うと、子供心にも孤独の感が激しく胸を刺して、熱い涙が悲しく恭二の頬を流れた。

恭二は幼い時から二親に一向慣染なじまなかった。兄弟や、そのほか家内の者にも、少しも暖い親しみを覚えた事がなかった。癩癬かんべきの烈しい、我意の極端に強い父親の態度は、心弱い恭二にはとうてい堪えられないほど、いつも怖ろしかった。神経質な母の氣質を、なお一層ひどく受け継いだ恭二は、歳とともにだんだんいじめてひねくれた子供となった。父はそれをなおそうとしては、ますます厳格な、むしろ峻烈な取扱いをした。恭二は怖ろしい怒りを、一時でも逃れようとしては、時どき都合の好い嘘言もついた。それが知れるたびに、火の出るような鞭の音は、しばしば柔らかな少年の肌に鳴った。それでも、かたくなな恭二は依然嘘を通そうとして決してそれを謝罪しない。肉を引き裂くような鞭の音がヒュッと鳴って、全身の神経が焼き付くような苦しい目にあっても、恭二は決して前非をあやまらない。ただひいひいとたえだえの叫びをあげながら、苦しく畳に顔を埋めるばかりであった。

一度などは、細曳で固く縛られて、裏の古井戸へつるされた事すらあった。

冷たく薄暗い穴の中へ体がずるずると落ちて行った時は、全く生きた心地はしなかった。井側のない穴の周囲には、一面に草が茂っていた。上から崩れ落ちる土に混って、草の雫が薄気味悪く襟元に

しみた。やがて打ち振う爪先が、氷のような底の水にびしゃびしゃと濡れた時は、縛られた手の痛さをも忘れてしきりに救いを呼んだ。救いは求めるが、決して謝罪はしなかった。「たとえこのまま死んでも、あんな父には降伏したくない」こう思い詰めてはいるが、血も肉も凍るほどの激しい怖れに包まれて、恭二は声を絞って泣いた。自分で自分の声が聞こえないほど、烈しく泣いた。

こうして育てられて来た少年が、「家」に対して抱えている感情は、ただ、恐怖と猜疑とだけであった。恭二が怖れに充ちた眼をあげて、人の顔を盗み見るのが嫌だといって、父は食事をさえ共にしなかった。そのために恭二は、その部屋と定められている薄暗い倉の前の三疊で、毎日ひとり寂しい膳に向かった。したがって家の人々との交渉は、自分の方から出来るだけ避けた。たまたまやむなく母家の中を通る時は、音をたてないように、そっと爪先で歩いた。瘦せた蒼白い少年が、臆病らしく足音を盗んで歩く姿は、冷たい影が動くのよりも寂しかった。

恭二の家には土蔵が十二ほどあった。それがたいしては空である。米を入れたのが一つと、家財を入れたのが一つある。そのほかは空でなければ、先代まで使ってた、古い大型な味噌桶が朽ちるがままに投げ込んであった。恭二は大方の日をその使い捨てられた土蔵の中で暮らした。

裏の方の土蔵などは、もう幾年か屋根を葺き換えた事がなかった。瓦が壊れようが漆喰が崩れようが、そのままに打ち捨ててあった。窓を開けてもなお薄暗い内側の壁には、いたるところに雨の汚点（しみ）が傷ましく滲んでいた。黴臭い板の間に肌寒く身を横たえながら、心のひねくれた、蒼白い少年は、いつも朽ち行く壁を寂しく眺めて暮らした。

壁の汚点にはいろいろな絵模様があった。犬の形もあった。婆さんの後姿もあった。独りじっと眺めていると汚点の中にいろいろと、自分の好きな絵模様が出来る。雲にしてみたり、日本の地図の断

片にしてみたりしては、憐れな少年は、その孤独を慰めた。その絵模様の中に、ふと父の顔が見えると、恭二は、神経の末端までも慄えるような、嫌な悪寒を感じた。そしていったん、あの怖ろしい父の顔が見えて来ると、どちらを見ても壁の中から同じ怖ろしい顔が浮いて来る。瞳が針の尖端のように光って黒い唇がにがにがしげに慄える。その怖ろしい顔がこうして無数に周囲に見えて来ると、恭二は、そこにいたたまれないほどの恐怖に襲われる。臆病らしく眼を閉じて、冷たい板敷に顔を伏せると、背中の上で、ヒュッ、ヒュッ、ヒュッの鞭の鳴る音が聞こえる。母や姉が救いを求める痛々しい声が、どこからか細く聞こえて来る。恭二は怖ろしさに跟^もめきながら、大型な味噌桶の中へ逃げ込んだのは、身を縮めていたいたしく慄えていた。……

こんな事のあった晩は恭二は必ず寝られなかった。わずかに食り得たくるしい眠りも、父に叱られている夢を見ては、すぐ破れると、全身に嫌な汗が溢れては悪寒を覚えた。こうして薄寒い少年の心は、自ら求めるともなく、日に月に傷つけられて育った。

犬が恭二の家へ来てから、はや三年になった。それは秋の雨が冷たく降る日の午後であった。案内を頼む声が聞こえるので、玄関へ出て見ると、町の芝居の木戸番の男が立っていた。黒い鯉口の袖に抱いて来た小犬をおろしながら、「せんだって、奥様が犬の子が一匹欲しいってお頼みでしたから、今日、好いのを見付けて持って来ました」と犬の紹介をした。

家中が皆玄関へ出て礼をいった。その時初めて来た家の玄関へ、ヒロが平気で小便をした事と、「あの人も、犬をくれるのに大玄関から来なくっても、よさそうなものに」といって母の笑った事をいまだに恭二はよく覚えている。

この時から初めて孤独な少年の、薄暗い生活に一脈の温かみが湧いた。恭二にとって、ヒロはなくてはならないものとなった。今までは、じめじめする、光の乏しい土蔵の二階へ隠れていても、なお怖ろしい父の圧迫を忘れる事は出来なかった。家にいても、野にいても、学校にいても、今までは自分で自分の影を見詰めるほか何をも得られなかった。むしろ何をも欲しなかった。それが可憐な茶色の小犬によって、愛情に対する嬉しい報酬を得た時、恭二の心に初めて温かい影が動いた。

今まで小学校へ行く時のほかは、たいがい恭二は、冷たい土蔵の中に、薄暗く生きて来た。それがヒロが来てからは、多く戸外に暮らすようになった。田圃の小流も、丘につづく雑木林も、恭二にとって新しい影を帯びて来た。ヒロが小さい姿を元氣よく躍らして走るところには、どこにもいたるところに、生き生きとした強い力が見えた。恭二は、土蔵の陰の壁に糸をつけては、小犬の丈が育つのを楽しみにした。小犬の体軀が一寸一寸と育って行くにつけて、自分の力もそれだけ強くなって行くような気がした。

恭二は、自分が寝起きをする蔵前の部屋の前へ犬小屋を置いた。夜中に眼が覚める時などに、犬が小屋の中でごそごそ動くのを聞くのが嬉しかった。木枯しの強い晩などには寒さに啼く小犬を憐れんで、自分の床へ入れてやった事がたびたびあった。ところがある晩知らないうちに、小犬が床の中へ糞をたれた。それが次の朝、家内の者に知れた時、恭二はまた、父の鞭を浴びた。「そんなくだらない事をするんなら、犬を川へほうり込んでしまふぞ」と父が鋭く怒鳴った時、恭二は生まれて初めて、憎い父に謝罪した。そして可憐な小犬のために甘んじて憎い鞭を受けた。後で考えて、謝罪した事が心から口惜しくって、口惜しくって、その夜は朝までまったく寝られなかった。あれが自分をほうり込むといったのなら、恐らく謝罪しなかったろう。たとえ寒い水へ投げ込まれても、歯を食いしばって、